

ザルツブルク聖霊降臨祭音楽祭 2022

(期間：6月3～6日)

取材：文・中東生
Text: Shinobu Nakai

テーマは「セビリヤ」

メゾンプラノ歌手のチェチーリア・バルトリが芸術監督を務める、ザルツブルク聖霊降臨祭音楽祭の今年のテーマはスペインの「セビリヤ」。人気テノール歌手で演出でも評判の高いローランド・ビリヤソンが演出、バルトリみずからロジーナを歌ったロッシェー(セビリヤの理髪師)をメインにプログラムが組まれた。

アイデアが散りばめられた 《セビリヤの理髪師》

今年はセビリヤがテーマのザルツブルク聖霊降臨祭音楽祭、ロッシェーニ《セビリヤの理髪師》2日目となる6月5日は、病気のためベルタ役のレベカ・オルヴェーラがラヴィーニア・ビーニに、フィオレツォ役のホセ・コカ・ロツァがステファン・アスタコフに代わったが、二人とも上手くこなした。

ローランド・ビリヤソンの演出はいたるところにアイデアが散りばめられている。それに反し、ジャンルカ・カプアーノ率いるモナコ公国王子音楽隊は遊びがなく、無事に進行させることに終始した。チェチーリア・バルトリ扮するロジーナは映画女優という設定。登場早々、ギャグ満載なフィガロのアリアも、ニコラ・アライモの裁量でなんとか実現された。ハンマークラヴィーアのアンドレア・デル・ピアンコも独創的な伴奏で笑いを盛り上げ、ロジーナの手紙をフィガロが読み上げる部分では映画「ゴッドファーザー」のテーマを弾くと、アライモがシチリア訛りになるなど、オペラということを忘れてしまふ芸達者だ。アルマヴィーヴァ伯爵役のエドガルド・ロチャも安定した歌唱力と、セレナーデの2番ではフラメンコふうに着メたり、ドン・アロンゾに扮する場面でグレゴリオ聖歌ふうに歌ったりと、観客を痺れさせる。ドン・バルトリも演技派翁アレックスサンドロ・

コルベッリだが、以前よりも歌唱技術が磨かれた。ドン・バジリオ役のイルデブランド・ダルカンジェロも長い指ととんがった耳の悪魔風貌になりきり、脇を固めた。そして代役のはずのベルタのアリアはしっかりした声で、紳士用コートに自分の腕を通して自分の体を愛撫するジェスチャーも上手く魅せ、この役に存在意義を与えた。通常カットされる部分をたくさん聴けたが、ストーリーが解りやすくなり効果的だった。フィナーレではロチャが高音で勝負を賭け、アリアや二重唱でもビシッと決めるのだが、ほかの女性に色目を使い、最後はそのうちの一人と館に消えていく、という《フィガロの結婚》(ボーマルシェの戯曲、モーツァルトのオペラで有名)につなげる終わりかたまで考えてあった。終演後は、誕生日だったバルトリのためにみな歌うサブライズが用意されていた。

観客を熱狂させたドミンゴ

同日夜はセビリヤ生まれのマリア・バヘスとその仲間たちのフラメンコ・シヨ「オレンジの花への頌歌」でセビリヤに瞬間移動した。その迫力に耐えられないほどのエネルギーが、舞台上から会場のフェルゼンライトシユレを満たして膨張し続いていた。

6日のガラ・コンサート「カルメンシタ&フレンズ」は想像を絶する満足感に包まれ、すべてを記せないのは残念だ。まず存在だけで観客を熱狂させたのはプ



ドミンゴ(左)とバルトリ(右)。まだまだドミンゴの人気は健在だ ©Monika Rittershaus / Salzburger Festspiele

ラシド・ドミンゴだ。前日から病気のオルヴェーラに加えてマリア・アグレストも病欠となり、バルトリがすべての女声パートを引き受けた。そうして実現したドミンゴとバルトリのモーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》の二重唱。Mc 100騒動を思い出させるが、やっぱりドミンゴは舞台人だ。バリトンの役では鳴らないテノールの美声を聴かせるサルスエラも光った。

オペラ・アリアとしていちばん満足を与えたのは、ヴェルディ《運命の力》からドン・アルヴァーロのアリア(不幸な者の人生は地獄)を歌ったビョートル・ベチャワだ。続くレオノーラの祈り(天使たちの聖母)もバルトリがアグレストの代役を見事にはたした。そしてもちろん、バルトリが歌うカルメン抜粋が聴けたのも貴重な体験だ。音量や豊かな胸声に欠ける部分を表現や弱声の使いかたで補ったカルメンは、バルトリの歌唱テクニクと知識が実現させた模範歌唱と言えよう。開演時、ビリヤソン病欠に気落ちした観客も幸福の精霊に満たされた。



Salzburger Pflingsten Festspiele 2022

芸術監督バルトリ(中央右)も出演した《セビリヤの理髪師》は、楽しい上演となったようだ ©Monika Rittershaus / Salzburger Festspiele